



2016年12月5日

## 認知症ケア強化への取り組み

SOMPOケアネクスト株式会社（社長：遠藤 健、以下「SOMPOケアネクスト」）は、認知症ケアの一環として、下記2点の取り組みを進めていますので、お知らせします。

### 1. 本間昭氏と顧問契約

SOMPOケアネクストは2016年10月から日本の認知症研究の第一人者、本間 昭氏を顧問に迎えました。

介護の軸となる自立支援において、認知症を患っている方に対する専門的なケアは必要不可欠であり、関わるスタッフが専門知識と技術を磨くことにより、早期発見や緩和が可能になります。

本間氏から、ホームやデイ事業所への巡回時に直接助言を受けるほか、事例検討会の意見交換の場や社員研修を通じて認知症ケアに関する幅広い知見や経験を共有することで、スタッフの専門性向上を図ります。

#### 【本間 昭（ほんま あきら）氏 プロフィール】



◆日本認知症ケア学会 前理事長

◆お多福もの忘れクリニック管理医師

長年にわたり認知症の予防・治療、研究に携わる。  
日本で初めてアルツハイマー型認知症の診断・治療・ケアのガイドラインを作成、2000年には認知症ケアの情報の発信と交流の場となる「日本認知症ケア学会」を設立。

### 2. ICTの活用

#### （1）表情のスケール化

2016年10月から運営する有料老人ホーム全棟（116棟）で、新システムの運用を開始し、ICTを活用した表情のスケール化（以下「表情スケール」）に取り組んでいます。

SOMPOケアネクストでは、全ホームにおいて介護記録の入力・管理をiPa d®でシステム化しており、全スタッフが統一フォーマットに入力しています。「表情スケール」は、介護記録の各項目において、介護される方の表情を“顔文字”として入力できるシステムです。

項目は「笑顔」「不安・悲しみ」「無表情」「眠っている」「穏やか」「不満・怒り」の6つで、食事やレクリエーション、排せつなどの介護記録入力時に対象者の表情を入力します。

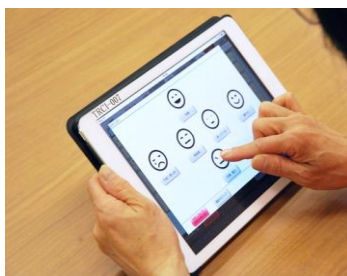
認知症患者には、脳の損傷等のさまざまな理由によって言語に障害がおり、言語コミュニケー

ションが阻害される症状が生じます。その中で「表情」を意識・観察・記録することは、認知症患者のニーズを明らかにし、把握するために、非常に重要な手段です。

システム開発においては、“LINEのスタンプのような、楽しく簡単な直感的操作”とスタッフの介護記録入力にかかる労力軽減を重視し、より即時性の高い感情の記録を可能にしました。

## 【表情スケールの活用】

- ・ ケア職員の「表情を見る習慣づけ」を促進し、表情から情報を読み取るスキルを向上する
- ・ 状態の変動を表情からデータ化し時間帯による傾向を把握する
- ・ 睡眠状況や栄養・水分摂取、天気や騒音など環境との関連を検証してケアに活かす
- ・ 対応するスタッフによる影響を分析し、人材育成に活用する
- ・ 顔を見て話しかけることで、入居者の皆さまに安心感を感じていただく



左) 入力画面。LINE等での入力感覚で若い世代にも親しみやすく「表情をケアに活かす」という介護スキルの向上を自然な形で促していく

右) 1日、1か月の変化を一覧で見られ、認知症周辺症状と環境との関連性の分析に役立つ

## (2) 睡眠センサーの活用

ICT活用の一環として、睡眠センサーを導入しました。先行導入として、数ホームで進め、必要に応じて各ホームへの展開を進めています。

睡眠センサーは、マットの下に敷くシート状センサー（非接触型）で、睡眠状況（睡眠・覚醒）をデータで取得することが可能です。データを取得・分析することで、生活リズムを整え、BPSD※軽減を図るための一助にするほか、睡眠薬等の眠りに対する薬の影響の分析、夜間の排せつリズムを把握し、排せつケアの効率化を図ると共に自立支援に活用する等、健康と深い関係にある睡眠状況を個別に分析・把握し、自立支援において幅広く活用していきたいと考えています。

※BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) とは、認知症の周辺症状のことで、「行動・心理症状」とも呼ばれる。周囲の環境や人との関わりのなかで起きてくる症状で、暴言や暴力、興奮、抑うつ、不眠、昼夜逆転、幻覚、妄想などがある。

## 3. 今後について

これらの取り組みにより、SOMPOケアネクストでは個別性の高い介護の実現により一層尽力し、安心・安全・健康に資する最高品質の介護サービスの実現を目指します。

以上